

図書紹介

ダニエル・J・ウォルシュ、M・エリザベス・グラウエ著

『文脈の中での子どもの研究—理論、方法、倫理』

津守 真

著者のダニエル・ウォルシュは心理学者であり、幼児教育の研究者として実証心理学とは違う方法論を模索している。この書物はその過程で生れた労作であり、一九九七年の出版である。米国の心理学で、近年質的な研究がなされていることを私は聞いていたが、

この書物はその中に位置付けられるだろう。私は、昨年秋に兵庫教育大学付属幼稚園にいったとき、たまたま著者と知り合い、この書物を頂いた。そして今回日本保育学会で教育対談をすることとなったので、この書物を紹介したい。

研究は発見することである

保育研究は、この世界を子どもにとって住みよい場所にするためのものであることを著者は最初に強調する。これは私共に共通の保育研究の大前提である。

子どもにとってよりよい場所とはどういう所かは、人によつて考えが異なるだろう。著者は次のように言う。「この世界をより良い場所に行っていると信じる人は、ひとりよがりになり、傲慢になりやすい。研究者は世界をよりよくする道を発見しようと挑戦する。

『発見』の反対は『発見しない』ということではなく、『あなたのために良いものを作り上げた（makeup）と思う』ことである」。

研究というと一般法則をつくることという考えがわれわれの中に根深くある。そうではなくて、子どもをよく見ることから、子どもを発見するのが研究である。

子どものために良いプログラムを作り

上げたという虚構が今世紀後半を支配してきた。著者は、子どもの考えに忠実になって子どもを発見しようとし、その過程を明らかにしようとしている。著者は言う、「それには労力と費用がかかる。

われわれは出掛けて行き、見聞きし、浸つてさわり、何度もそれを繰り返し返さねばならぬ。フィールド（保育現場）で生み出されたままの素材から記録をつくるプロセス自体を問いなおさねばならない。その結果の知識は不確定であり、変化するものである。それでよいのだ。知識をつくるのは人間のなすわざである。それは決して確実にはならない」。これは私もいつも考えていることである。

「ひとつの逸話記録を取り出すのに、な



んでそんなに時間をかけるのか。アメリカの文化は特に『する』ことに価値をおく文化である。そこでは何かを形として作り上げること (makeup) が高く評価される。発見されるものは、人々が期待するとおりのものとは限らない。発見は、文化がすでに知っていることに反するかもしれない」「何故子どもを研究するのか。答えは、発見することである。発見し続けよ。

われわれが発見しなければ、だれかが虚構を作り上げる。実際、だれかがすでに作り上げ、それが子どもの生活、子供観、政策決定に力をもってきた。発見は、支配のイメージに挑戦する」。これはなかなか名言である。私はそのとおりだと思う。

この書物は、幼児に焦点をあてている。前半で理論に力を注ぎ、後半で、具体例を引いて記録と解釈と記述の方法について丁寧述べて行く。理論編では、第一章 対象としての子ども 第二章 解釈の科学 第三章 文脈としての理論 第四章 倫理 第五章 文

脈としての研究者の役割について論じる。後半は具体例を取り上げてゆく。第六章 データを生み出す 第七章 記録を構成する 第八章 文脈の中で解釈する 第九章 文脈として記述する 第十章 結論、と記録を文書の報告にするまでの過程を丁寧追う。

この書物を紹介するにあたり、私は後半の具体例を主にしようと思う。

レディネスに関する観察

著者は幼稚園から小学校一年生へのレディネスについて長年関心をもっていた。「レディネスの観念がどのようにして構成されるに至ったか、幼稚園から小学校への移行にあたって末端の地域の学校の学区の中でそれがどのように伝わってきたかに興味を抱いてきた」。「子どもは生徒として構成される」と著者は何度も述べる。レディネスを語るとき、子どもは「子ども」ではなくて「生徒」になる。子どもを生徒としてしか見

ない。

著者たちは、毎週S小学校の付設幼稚園と一年生のクラスを訪問した。年間を通してクラスに参加し、観察記録をとった。その整理をふくめて観察の方法に後半が費やされる。とくにひとりの子どもJの資料が取り上げられる。この書物は保育研究者を念頭において、この部分に多くの紙数を割いている。繁雑ではあるが、書物の順を追って紹介しよう。

幼稚園第一日 九月三日観察記録（米国では新学年は九月にはじまる）

「ベルがなる前に、教師ミセスWは園庭に顔を出してクラスをむかえる。『神経質な親子がいますね』と言いながらドアの外で子どもを迎える。子どもたちは列をつくって教室に入る。ひとりずつ入るように注意する。ミセスWが『かばんの中に何か入っていますか』と言うと、子どもたちはカバンを調べ、先生に見せる。必要のあるものを取り出し、カバンをコートかけ

にかける。ある子どもたちはカバンをもって教室に入り、うろろ歩きまわる。教師はコートかけにおくうに言う。大部分の子どもたちは絨毯のところに座るが、かなりの子どもが立ったままおしゃべりをして、おもちゃをいじったりしている。Jは悲しそうな表情で、教師にくつついている。『Jさん、あなたは私の隣に座っていいですよ。――さあ、皆さん、座りましょう。皆さん、いいですか』（先生は皆が気持ちよくしているかどうかを見る）。

かなり形式張った第一日のように見えるが、よくみるとそれほどでもない。

第一日の記録につづいて、九月二四日の絵をかく場面でのJの未成熟の行動、二月一三日の数を数える場面、五月一四日の泣く場面のなまの記録が記される。これらはなかなか読むのが面倒である。

私も、保育の研究会に行くと、なまの記録をしばしば渡されるが、読む気を起すまでに時間がかかる。こ

の著者も、それでは研究物として不十分と感じている。もつと子どもが見えてくる記録の提示の仕方がないかと苦勞している。どうすればよいか。

次のステップがメモである。表面を超えて根底にある状況をみるのがメモの目的である。

メモ

「Jは、レディネスの点で従来から問題視される特性をすべて備えている。Jは早生まれで体も小さい。彼は最初の日から泣いた。しかし他にも泣く子はたくさんいる。彼は特定の子どもTとの関係で泣く。Tはいじめっこで、私もTと話していると泣きたくなることがある。Jは仲間の子たちの活動に参加してかなり上手にやる。数や文字もできる。仲間と折り合える」。他の人達がJはいつも泣いていると言うのだがそれは何なのかと著者は疑問をもつ。「Jの周囲の人達がJをどうみているかを理解できたら役立っだろう。良い

幼稚園児の基準は何なのか」。メモは個人としてのJを記している。Jを新しい角度から理解することを試みたいと考え、そのために、Jの教育体験に重要なふたりの人、母親と教師のインタビューをする。「幼稚園と一年生への期待が、未成熟と言われるJへの見方の舞台を設定している。Jについてのある決定をするのに、この期待が人々に力をもっている」。

要するにその保育現場をよく知っている人の感想をまじえた解説であろう。

教師ミセスWの期待

「最初の頃は子どもは自由遊びがだいじだ。しかし次第に私は『お仕事』を導入する。一週に三つか四つの仕事に責任をもたせる。そして仕事と遊びのバランスをとることを学ばせる。仕事ばかりする子どもには自由遊びを、遊びばかりする子どもには仕事を。私は選択を重視する。しかし一日中ではない。先生がしなさ

いという時間と子どもが自分で選ぶ時間と」。

アメリカでも日本でもよく似た状況があることがわかる。

メモ

「教師の期待は同僚によって梓づけられている。成熟のパロメーターのひとつは、子どもが幼稚園で適切な仕事を選ぶ能力である。適切さの基準は先生が選んだ仕事を子どもがするかどうということである。幼稚園教師は一年生の先生の同僚から、新入学児が十分に成熟していないまま学校に入ってくることをしばしば聞かされている。幼稚園教師としての評価は、生徒が一年生のカリキュラムをこなせるかどうかである。この基準に合わない子どもは遅れていると見なされる。それは上級学年の基準によってきめられ、子どものニードから生み出されるのではない」。

上の段階の方が優先するのも、いずこも同じであ

る。中学生がわるいことをするのは、幼稚園のせいだという論議もこれと同じだろう。こうして乳幼児期はいつも後回しにされる。

子どもへのインタビューと他の子どもとグループで行われた。

子ども自身の考えを聞けるといい。この書物の子どもたちは、ある程度言語で表現している。それはグループでの自然の会話の中で示される。著者は、ピアジェの会話法による研究に懐疑的である。ピアジェはそこから一般法則を作り出そうとしているので、著者はそれとは違う立場をとっている。ただし、子どもの考えに耳を傾けようとしている。遊びの時間と仕事の時間をコントロールしてきめるのはだれかを子どもに尋ねてい



る。Jは繰り返し、自分は遊びたいのに、遊びが中断されて仕事の時間になることを訴える。子どもが自分が決めたのではない仕事を、進んでやるかどうかによって評価がなされる。Jはこの基準に対して反抗している。興味深いことは、Jは教師の枠づけをそのまま自分の基準として取り入れていることである。これらの資料からリーディング（読解）を行う。

リーディング1

教師はJの像を古典的なレイネスの問題をもつ子どもとして構成している。成熟度の観点から見れば、Jは生まれ月でも社会情緒面でもレイネスのない子どもである。教師とコミュニティの観念がJの見方を枠づけている。

リーディング2

解釈的読み方―Jの解釈にだれかがかかわっている

か。彼等はどうな役割を与えられているか。

母親の役割は子どもの学校を最善のものとするために小児科医や専門家、先生からインフォメーションを集めることである。教師は子どもが学校での成績をあげるのを助ける役割である。子どもは幼稚園のカリキュラムを遂行する社会情緒的レイネスによって定義づけられる。

勉強の構造―教師は自分で仕事を選ぶ子どもを成熟しているとみなし、Jはそれに達していないと考えている。Jは学校は面白くないと考える。

参加の構造―親たちはカリキュラムについて語るが、Jの母親はそのネットワークの中心にはいなかった。彼女はほかの親たちほどにはそれに従うプレッシャーは経験していなかった。

コミュニティのメンバーによって課せられるゴールと目標―この学校の評価は成績が良くなることである。平均Bでは十分でない。

これらのことを考えてみると、なまの観察記録では不十分である。伝えたい部分に焦点をあてて、観察記録を書き直すことが要請される。著者は、ヴィニエツト形式を提唱する。

これは逸話記録に近いが、これまで述べてきた手続きを経て、実際に忠実に、しかも文学的に表現する記録形式である。

ヴィニエツト (vignettes)

第一日の配慮―(先の第一日九月三日の記録を書き直したものの)

「ウイスコンシンの気持ちの良い夏の朝である。ミセスWの幼稚園第一日、教室の窓から太陽が射し込んでいた。ミセスWは机の上の書類のページをめくりながら時計を見て、それから窓の外を見た。園庭で遊ぶ子どもたちの声が一杯に聞こえていた。彼女はドアに向かって歩き子どもたちを向かえた。神経質になってい

る子どもたちと親たちがいますねとドアから外に出ながら言った。ベルが鳴り、子どもたちはきめられたように並び、教室に入った。幼児たちはとても小さく見えたが、ゆつくりと親から離れた。あるものは大きく笑い、あるものは心配そうな顔をして。――ミセスWがじゆうたんのところに子どもたちを集め、みんながまるく座った。おしゃべりしている子どもたちもいたし、手当たり次第に触っている子もいた。Jはグループからはなれて立ち、ミセスWの影のように後ろにさがっていた。――」。

このヴィニエツトでは、Jがクラスからはなれて立っていたこと、ミセスWは第一日の必要に答えていたこと、Jが泣くことについて示されている。このヴィニエツトは観察記録にかなり近い。見えたことに限定され、推論から生れる深部はまだ見えていない。ヴィニエツトは、書き手の想像力と、統合力を必要としている。その点では、フィクションであり、だれか

に何かを伝える性格をもつ。それは読み手を創造的に全体的理解をもつてフィールドに連れて行く。次のヴィニエツトはこの点をもつとよく示すであろう。

「Jは積み木のコーナーで、彼が作った高いビルディングを得意になって見ていた。三つの塔と、橋がふたつと動物小屋ができていた。いままでに作ったものなかで一番うまくできたと思っている。彼はほかのものは何も目に入っていなかった。ミセスWが片付けの時間ですよといったとき、彼は積み木のコーナーにとんでいった。彼は朝起きたときからこれを作ろうと考えて幼稚園に来たのだった。彼は自分一人で積み木ができることに満足した。突然他の子が来て塔をこわし、橋はつぶれた。Jは泣き声を出した。涙が流れ、『せんせい』と言って動かなくなった。先生は部屋の向こう側で他の子どもたちと『お仕事』をしていたが、Jの泣き声にそちらを見た。『今週Jは毎日積み木ばかりしている。そしてお仕事をしていない。こん

なことでは一年生になったらどうするだろう。彼がしたいのは遊びばかりだ。』またJの泣き声が聞こえた。『なんてことだ。これでは一年生の先生ともうまくやっていけないだろう』。

このヴィニエツトは著者と読者をJの文脈に連れて行く。

「積み木をすることが彼のお仕事だった。彼はそれを誇りに思い、母親は家庭でそれを奨励していた。彼はこんなに素敵なものをつくれたのは成長のしるしと思つた。先生の見方はそれと対照的だった。教師はJが積み木コーナーを選んだのは未成熟のしるしと解釈した。彼女はJが仕事よりも遊びを選んだことに苛立つた。教師にとつては泣くことはミルクをこぼすことに等しかった。成熟した子どもだったらもう一度積み木をつくるか、あるいはお仕事のコーナーに行つたらう。著者として私はいくつもの資料源からアイディアをひきだし、行為者の他の経験から明らかな物語を

織り成す。先生は丁の積み木を未成熟のしるしと見て、小学校にゆくレディネスができていないと考えたのである」。

教育界で常識になっている『レディネス』という語が、この先生の見方を妨げていたのだった。ヴィニエットは読者に統合的なインフォメーションを与え、解釈を具体化する。ヴィニエットは物語の力の故に力をもつ。それは意味をもった体験を伝える。それは科学的と同時に文学的である。

私はかつて一九七〇年頃に本田和子さんが私共の「観察研究」で、「水曜日のうた」と名付けて観察記録の報告をされたことを思い起こした。

こうしてこの書物は、観察を科学的研究として位置付けながら、ヴィニエットという文学的とも言える読者を意識した記録形式に至る過程を丁寧に記載している。限られた紙面で難解だったかもしれないが、図書紹介とする。

M.Elizabeth Graue&Daniel J.Walsh

“Studying Children In Context

—Theories, Methods, and Ethics”

Sage Publication 1997

